
鋼鉄の咆哮～異世界からの反逆者

天津風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鋼鉄の咆哮～異世界からの反逆者

【Zコード】

Z2569B

【作者名】

天津風

【あらすじ】

超大国・ブリタニアに3分の1を支配された世界で日々の国から集つたレジスタンスは必死に抵抗を続けていた。しかし、その夜の海戦でも決定的な戦力差の前に今にも押しつぶされようとしていた。だが、満身創痍の彼らの前に現れたのはブリタニアにすら存在しない超技術で武装した大型戦艦だった。

プロローグ（前書き）

PCソフト「鋼鉄の咆哮」シリーズと
TVアニメ「コードギアス・反逆のルルーシュ」の
世界設定をお借りしています。

しかし、コードギアスに関しては
現在放送中ということもあります。

作者が勝手に作ったオリジナル設定や
原作の設定を改変したものが多々含まれます。
ファンの方は不快に感じる恐れが大きいので
閲覧を避けていただければ幸いです。
あと、ルルーシュは出ません。

言い訳になりますが、戦闘シーンなどの描写も
ゲーム内の設定や聞きかじり程度の
知識でまとめてありますので、
(なんでこんなとこに艦隊がいるんだよ！
にこんな機能ないよ！)
などと言った、現実的におかしい
突っ込みどころも多々あると思いますが
何卒ご容赦ください。

プロローグ

皇歴20XX年 9月8日

マリアナ諸島近海 北緯11度40分 東経140度40分

時刻 02:17

2つの艦隊が交戦状態にあつた。

しかし、一方の艦隊、つまり国際機密部隊（ISF：International Secret Forces）は既に半数の戦力を喪失。

装備の面でも圧倒的に差を付けられており、半ば片殺しの様相を呈していた。

国際海上機密部隊の保有する兵装は、数世代前の速射砲や対空・対艦ミサイルのみ。

対するブリタニア軍は、大型空母から射出された正体不明の人型兵器、ナイトメアフレーム（Knightmare Frame）による

電光石火の包囲・斉射により、敵の速射砲に照準を合わせる隙も与えず

次々とISFの艦を撃沈して行つた。

「左舷前方より敵ナイトメア接近、およそ15機！」

「一体どこから湧いて出やがる！」

「主砲攻撃始め！」

「畜生……当たりやがれ！」

ISF艦も活路を開くべく必死に応戦するが

脚部に装備された水上移動ユニットにより、高速で海上を駆け抜け

る水上ナイトメアは

持ち前の機動性で主砲発射とほぼ同時にコースを変え、砲弾は」と
“とく回避された。

「敵ナイトメア、さらに接近、距離800！」

「C I W S、攻撃始め」

だが、再び彼らが攻撃に移る前に先頭のナイトメアがISF艦に踊りかかる。

「くたばりやがれ…テロリスト共があ！！」

胸部から放たれた有線式アンカーが艦橋を貫きC I Cに到達、内部を粉々に碎かれクルー全員が死傷し、艦は完全に沈黙した。後続のナイトメアがアサルトライフルの一斉射撃を浴びせかけ、両舷を蜂の巣にされたISF艦は

巨大な気泡を吐きながら暗い海面に飲み込まれていった

事の発端は、神聖ブリタニア帝国の日本に対する突然の宣戦布告だった。

元々、レアメタル「サクラダイト」の貿易をめぐり、度々摩擦を引き起こしてきた

2国間の関係は良好と言えるものではなかった。

開戦回避の工作も何の成果も挙げられぬまま、戦争に突入。

しかし、各国に先んじて

不可解とするといえる科学的進化を遂げた神聖ブリタニア帝国の新兵器の前に

日本は成す術もなく敗れた。

超大国ブリタニア帝国に支配された日本。

「エリア11」と名付けられたそこで、日本人はイレヴンと呼ばれ、誇りさえも超大国の支配下に置かれていた。

この世界では、ドイツ・フランスなど、かつて先進国と呼ばれた独立国家も

同様にして超大国に侵略されてしまっていた。

国際機密部隊は、そのようにして蹂躪された国々から軍人・学識者などが集まつてできた反乱軍であると考えてよい。各国の資本家の出資を受け、小規模ながらも陸海空軍を組織し、祖国奪還の機会を窺っているのだ。しかし、往々にしてブリタニア軍の兵力の前に押しつぶされてしまうことが多かつた。

今夜の海戦も、海戦の体裁すら繕えぬままブリタニア軍の一方的な勝利に終わると思われた。

国際機密部隊旗艦「マルセイユ」艦橋

元フランス海軍所属のフリゲート、マルセイユの艦橋内には怒号と指令が飛び交っていた。

「ハープーン攻撃始め！1機でもナイトメアを落とすのだ！」
「艦長！ハープーン発射機^{キャニスター}は先程の斉射によるダメージで使用不能です！」

「残りの使用可能な兵装は？」

「CIWS1機、残弾数1179発のみであります」

「反撃はほぼ不能。となると撤退しか道は残されていないが……」

かろうじて生き残っていた旗艦マルセイユも、交戦中、たびたびナイトメアに甲板を踏み荒らされ、VLSセルが無残に抉れており

速射砲の砲身はひん曲がっていた。

「他に生き残っている艦は？」

「本艦以外には、“シェルブル”“コウナギ”“R型”的、3艦のみです。」

「我々は全速で当海域を離脱する。後に續くよつに伝えてくれ。」

「了解。」

神聖ブリタニア帝国海軍、水陸両用揚陸空母「エクスカリバー」ブリッジ

「敵は虫の息だ、一隻残らず火達磨にしろ！」

薄汚いナンバーズの反逆者どもを血祭りにあげるのだ！

「イエス、マイロード！」

中世の貴族を思わせる軍服を着た将校が、火器管制官に指示を飛ばす。

電探・映像パネル・その他の設備一つ一つを取つて見ても、この艦を作り上げた科学が既存のそれとは一線を画していることがわかる。

ちなみに、今、彼が発したナンバーズという言葉は、イレヴンを始めとする、ブリタニアに制圧された国の人々に対する蔑称である。

機関部から、空母右舷に備え付けられた40mm連装リニアキャノンに電力が供給される。

銃口にプラズマが集まり、次の瞬間

極限まで加速された光弾が漆黒の海をなぎ払う。

発射とほぼ同時に、マルセイユ前方10時方向に展開していた“シエルブル”に命中。

第1射で左舷の腹を食いちぎられ、轟沈した。

その後も、マルセイユを中心に輪形陣を展開していた国際機密部隊は、

空母とは思えぬ攻撃力に一方的に翻り殺しにされていった。

「ここまでか…」

マルセイユの艦長・アダルバート＝ウェグナーは

かつてフランスと呼ばれた祖国の地に残した妻子を思い出した。

艦長以下、他の乗組員たちは各自の戦うべき理由となつた人たちのことについてを巡らせた。

「兵装も残り僅か、本艦の脚では高機動の水上ナイトメアを振り切れん。」

「撤退も敵わず。ここまでか…」

「艦長…」

「子供たちに我が祖国を取り戻してやれなかつたのは無念だがね。」

「テロリストめ、とうとう機関停止したか！」

旧式のオンボロミサイル艦で、讃れ高き我がブリタニア帝国の艦に歯向かうとは！

どこまでも蒙昧なる劣等人種よ！」

あえてナイトメアを下げ、自らが駆る空母の兵装で反乱軍を血祭りに上げた

ブリタニアの将校は勝利を確信した。恐らく、彼の期待通り、その後反乱軍旗艦マルセイユはマリアナ海の藻屑と消えただろう。

この海域、いや、この世界に存在するはずのない、彼らさえ現れなければ。

「艦長！」

「どうした？」

「所属不明の艦から入電です！」

「所属不明？当海域には本艦と敵空母しかいないはずだが…」

確かに、このときマルセイユのレーダーには2つの光点しか映つていなかつた。

空母エクスカリバーにしても同じことだつた。

「確かに向こうからの入電が続いています
「繋いでくれ」

(本艦は第零遊撃艦隊、アジア方面軍旗艦“伊耶那岐^{イザナギ}”。これより貴艦を援護する。)

「ひらひらマルセイユ艦長、アダルバート＝ウェグナーだ。
援護はありがたいが、旗艦はどうやら居られるのだろうか。

(貴艦後方、距離1000。)

現在電波妨害装置により、我が艦は貴艦のレーダーに映らない。

目視にて確認されたし。）

最新鋭のステルス艦だらうか？
これほどの至近距離でも、まったくレーダーに反応が見られないとは。

「14番カメラに切り替える。」

クルーにビデオパネルに後方を映し出すよう指示した。
ウェグナーは驚愕した。彼の頭脳にある軍艦データベースに存在しない、

巨大な戦艦がマルセイユ後方に迫っていたのだ。

かつての戦争で沈んだ日本国最強の戦艦を思わせる漆黒の巨体。
艦首には、その戦艦の46cm砲を上回る3段式4連装の主砲。
艦尾には見たこともない形状の、恐らくは兵器が数基と副砲2段3
連装が搭載されていた。

そして、前艦橋と後艦橋の間の中庭のようなスペースには、VLS
数十セルと、

鋼鉄の曼荼羅を思わせる装置（こちらに關しては、兵器なのか電探
類なのか

見当もつかない）が据えつけられている。

一方その頃、ようやくブリタニア軍空母、エクスカリバーでも
突然現れた謎の戦艦の存在に気づいていた。

「な、なんだあの艦は！？」

「反乱軍にあれほどの大型艦を保有する財力はないはずだが……！」
「イレヴンが大昔の戦争で作った戦艦に似ているぞ……」

浮き足立つ乗組員のざわめきに気づき、エクスカリバー艦長は檄を

飛ばした。

「うろたえるな！イレヴンの旧式艦など、我がエクスカリバーの前では鉄屑同然だ！」

水上ナイトメア隊を出せ！！」

空母甲板のカタパルトから紫の人型ロボットが次々と射出される。水柱を上げて海面に降り立つたナイトメア隊は戦艦に向けて突進していった。

第零遊撃艦隊・アジア方面軍旗艦“伊耶那岐”艦橋

真っ白な軍服に身を包んだ男が、インカムを通して指令を出した。

「あの駆逐艦を全力で離脱させる！」

総員、水上戦闘用意！

両舷全速、敵艦前方へ進路を向けよ。」

伊耶那岐・艦内に警報が鳴り響く。

無駄のない動きで兵員たちが一斉に動き出した。

マルセイユ艦橋

ウェグナー艦長は、次々と起こる非現実的な状況を受け入れるのに精一杯であった。

謎の戦艦が進路をエクスカリバーに向けるや否や、その巨体からは信じられぬ程の

加速とスピードで敵艦に向け走り出したのだ。

通常、戦艦の速度は速くても30ノット前後と言われているが、あの艦の速度は明らかに50ノットを越えている。

駆逐艦ですら、いや、ブリタニアの科学力を結集した高速艇を以つ

てしても

あのスピードは説明がつかない。

彼らはいつたいどの国の軍隊なのだろうか。

エクスカリバー 艦橋

高速で迫りくる大型戦艦を見て、艦長は事の異常さをようやく理解した。

「ナイトメア隊、一斉射撃だ！早く、あの化け物に止めをさせ！」
叫ぶように指示を出すと、紫の巨人が連携の取れた動きで伊耶那岐を取り囲んだ。

その時、ナイトメア隊・隊長は、
あれだけの巨砲では取り回しも利くまい。

側面から接近し、舷側からアサルトライフルをばら撒き兵装を破壊、
艦橋にスラッシュ・シュハーケンを叩き込んで、ふざけた船体ごとナマス
切りにしてやる！

そう考えていた。

決して彼の判断が甘かつた訳ではない。日本軍と戦ったときもそつ
だつた。

しかし、残念ながら、一瞬前まで明後日の方向を向いていた、
最上部50・8cm砲65口径4連装は、既に彼が率いるチームに
向けられていた。

その他の巨砲群も同様だった。全方位から迫り来るナイトメア隊を
睨み付けるかのように

すべての、主砲・副砲が数秒で砲位角を修正したのだ。
狙いをつける必要はなかった。

「撃ちー方始めーーー！」

男は海軍独特的のイントネーションで砲撃の指示を下した。
マリアナ海に雷鳴が轟いた。

エクスカリバー艦橋

「嘘だろ！？」

「なんて威力だ！」

「か…艦長…！」

「ナイトメア、全機ロストしました！」

「なんであんなでかい砲がたつた数秒で…」

伊耶那岐を取り囲んだナイトメア隊は、砲撃の衝撃波で跡形もなく粉砕された。

直撃弾は僅かだったが、海面に幅百メートル以上のクレーターを生み出す50・8cm砲の衝撃波だけでも、全長4m前後のナイトメアを爆碎するには十分過ぎたのだ。

「…………！」

既に彼我の戦力差は明らかだが、

目の前の現実に半ばパニックに陥った艦長は、戦闘続行を指示する。

「40mm連装リニアキャノン発射！栄光あるブリタニア軍の新鋭空母が、

「イレヴン」ときに敗れることがあつてはならんのだ！」

「イ、 イエス マイロード！」

全砲門を同時発射した伊耶那岐は停止している。やるなら、今だ。どういうわけか、奴はレーダーに反応せず自動ロックオンできないが

この近距離なら手動で撃ちまくれば確実に命中する。

「撃て！……」

右舷から超高速で発射された40mm連装リニアキャノンは確かに、伊耶那岐を捕らえた。

だが、命中すると思われた弾丸は全て滑らかな曲線を描いて、南海の夜空に消えていった。

「な、な…何が…

貴様らは一体何者だ！」

ここにきて、初めてブリタニア軍将校は謎の戦艦と通信を開いた。

「我々は、第零遊撃艦隊。帰属すべき国家を持たぬ独立部隊であり、故あつて貴国方に反逆するものである。」

「ナンバー・ゼロだと…？まさか！貴様ら、黒の騎士だ」

エクスカリバー艦長以下、クルー全員は
全ての通信を終えぬまま

先程目の前で起きた出鱈目の現象の答えを知ることもなく、マリアナ海の藻屑と消えた。

伊耶那岐艦尾から放たれた、1条の光の束が、
空母エクスカリバーを真正面から貫いたのである。

後甲板に据え付けられた、エメラルドのような鉱石が散りばめられた装置が

余剰のエネルギーでキラキラと煌いていた。

私こと、アダルバー＝ウェグナーが

その光学兵器が「超怪力線照射装置」と呼称されていることを知ら

されるのは
少し後のこととなる。

プロローグ（後書き）

(12/19) “ご指摘を頂いた部分も含め、大幅に修正しました。
第零遊撃艦隊旗艦の艦名が他の作品と被っていたこともわかつたので
変更させていただきました。主役級の艦の名前が被るのはまずいですね…

下調べが行き届いていなかつたことを反省しています。
コードギアス本編のほうも日本製ナイトメア登場など急展開が続き、
目が離せなくなってきた。今後の展開が楽しみです。

第1話・時空転移艦隊

第零遊撃艦隊・アジア方面軍旗艦「伊耶那岐」艦橋

「敵、航空母艦撃沈！」

「少々危険でしたな。」

「ああ。軍本部が防御重力場を回してくれていなかつたら本艦も被害を受けていただろう。」

「いかにこちらの軍事技術が先んじているとはいえ、敵国の能力も未知数。」

油断は禁物です。」

「わかつてゐる。我々にはまだこの世界の情報が足りない。なんとしても彼らと接触を持たなければ。」

そういうと、男は窓の外に目を向けた。

先程まで続いていた激戦などなかつたかのように、海は穏やかに凧いでいる。

そこには今夜の海戦で唯一生き残つた艦が停泊しており、未だ僅かに漏れる黒煙が損傷の大きさを物語つてゐる。夜はまだ深い。

マリアナ海で、ISF（International Secret Forces）旗艦マルセイユを救助した伊耶那岐。ブリタニア軍空母の撃沈を確認した艦長・芹沢智晴中将は、副長の磐木と短いやり取りを終えた後、通信長に指示を出した。

「彼らに“高天原”まで同行願つ。通信長、あの艦に電文を。」

「了解。」

国際機密部隊旗艦「マルセイユ」

伊耶那岐の援護により、九死に一生を得たマルセイユだったが負傷者の収容や損傷箇所の修復などの事後処理に追われ、艦内は慌しげままだった。

艦長・アダルバート＝ウェグナーも全艦への指示に忙殺されていた。そんな中、通信士が例の不明艦からの電文を受け取った。

「艦長！伊耶那岐より入電です。」

「なに…」

ウェグナーは急いで電文に目を通す。読み終えると、驚きと困惑の混じった面持ちで深く息をつき口を開じた。

「艦長、彼らは何と…」

ウェグナーの様子を見た、副長のエドワードが尋ねた。艦長は、電文を彼に押し付けて答えた。

「見たまえ。彼らは自分たちがパラレルワールドから来た存在であると言つてゐる。我々と志を同じくするものであり、本拠地まで同行願いたいそつだ。」

「まさか！」

パラレルワールドと言えばSF小説などで見かける、あの…」

「そう。我々の世界と非常に似ているが、歴史背景などが微妙に異なる別の世界。

同じ舞台で配役や脚本を少し変えたようなものだらうか。

「艦長は信じていらっしゃるのですか？」

「わからん。だが、敵ではないのは確かだと思つ。

実際彼らのおかげで我々は助かつたわけだしな。」

「では、彼らの本拠地まで行かれるのですか？」

何らかの罠やブリタニア軍のスパイといつ可能性は……

「ないだろう。

あの艦を見れば、彼ら保有する戦力が我々を大幅に上回つてゐることは明らかだ。

旧式のミサイル艦を拿捕するメリットがあるとは思えんし、先ほどの戦闘でブリタニア空母を撃沈している。いかにブリタニアとて反乱軍を潰すために高価な空母をクルー一人と犠牲にはせんよ。」

「それに……」

ウエグナーはICOを見渡した。兵装を含む全設備の見取り図がある。

航行に最低限必要な箇所以外の、殆どの区画に使用不能を示す赤いランプが灯つている。

「断つたところで、燃料・弾薬も乏しい状態でいつブリタニア軍に出去くわすかわからん。そうなつたら今度こそ終わりだ。

どの道、我々がとるべき道は一つしかないぞ。

通信士、伊耶那岐に電文を。」

「艦長、マルセイユより返信です。」

「伊耶那岐 艦橋

芹沢は通信士から電文を受け取った。

「…先方は我々の申し出を了承した。

これよりマルセイユを伴い、高天原に帰港する。

針路115度、速力20ノット！」

バウスラスターが海水を噴出し、伊耶那岐はゆっくりとその巨体の向きを変える。

前方の大型艦に駆逐艦が追随する形で、2隻の艦はマリアナ海を離れていった。

目的地は第零遊撃艦隊が母港、高天原である。

“ ドック艦 「たかまがはら 高天原」 ”

最大船速14ノット、総面積427ha。

上空から見ると巨大な六角形の形をした特殊艦。

「艦」を名乗つてはいるが、軍本部を兼ねている中央の巨大な建造物を

取り囲むように配置されている各エリアには

それぞれ、兵員たちが暮らす住宅街、商店街、娯楽施設などがあり、我々が日々の生活で必要になるような施設がすべて揃っている。

それらに紛れ込むようにして点在している一際高いビルのようなものは、

高天原の排気塔である。

また、北端から北西にかけて戦闘機を主とする航空機が離着陸する飛行場がある。

いわば、高天原は動く巨大な人工島であった。

南端には艦船が停泊し、

修復・補給などを受ける港や兵器工廠・研究施設がある。

H-LGと呼ばれる建艦システムを備えた港では、

あらゆる艦船の修理・補給・新規建造が可能である。また、“向こう”で建造された艦艇は

全ての主要部位がパーソナライズされしており、兵装・機関はもちろん、艦橋や船体そのものすら換装することができる。

今は、ステルス機能を作動させ太平洋の中央に停泊している高天原は、

帰るべき故郷を失った彼らにとっての国のようなものであった。

「伊耶那岐」艦橋

「通信士、別働隊の様子はどうか。」

「は。現在、旗艦・ヴォルケンクラッシャーをはじめ歐州方面軍はアイスランド南西に停泊中。」

北米方面軍は、超兵器・アルティメイツトームとともに太平洋上に展開中であります。いずれも被害報告はありません。」「わかった。マルセイユの様子にも気を配つてやつてくれ。」「了解しました。」

報告を受け、艦長席に腰掛けた芹沢は

ポケットから取り出した懐中時計を眺めた。時刻は午前4時を回っている。

艦橋内には、通信士が入力装置を叩く音だけが小さく響いている。窓の外では依然として朧月が暗い海を冷たく照らしていた。

（静かだ。あの日我々が居た海のようにな……）

芹沢は、ふと自分たちの運命を大きく変えた、あの夜のことを思い出した。

本来、芹沢たちがこの世界に存在することは決してなかつた筈なのだ。

第零遊撃艦隊は、少々複雑な経路を経て

超大国「ブリタニア」が支配するこの世界にやつてきたのだがそれを説明するには、一日話を大きく過去に遡らなければならない。

第2次世界大戦の激化する最中、芹沢智治大佐が指揮する駆逐艦“霧雨”は、僚艦数隻を従えフィリピン沖を南下中であった。作戦内容は、撃滅された水雷船隊乗組員の救助。

「全艦、最大戦速で急行！」

「一人でも多くの兵員を救助せよ！」

一刻も早く現場に到着しなければ。

芹沢はテーブルに広げた海図と真鍛製の懐中時計に目をやつた。艦隊撃滅の報を受け、既に2時間。

全員が無傷で投げ出されたわけではあるまい。

救助を待つ間に息絶えた者も少なくないだろう。

全速で海原を駆け抜け、目標の座標点にあと少しといつとこり今まで来た。

そして、ついに見張員が望遠鏡の彼方に浮かぶ、救命ボートの一団を認めたのだった。

「艦長！発光信号です！」

懐中電灯の光で送られる救難信号がはっきりと見える。

「生存者だ。救護班用意、内火艇を準備しろ!」

その時だった。

突如、芹沢の懐中時計に亀裂が走り、それを切欠に次々と計器類が破損。

指針が逆回転を始めた。

艦全体が大きく振動し、芹沢たちは立っていることも困難になった。

「何が起こっている!」

「か、艦長! 本艦前方に何かが……!」

芹沢は目を疑つた。

先ほどまで殆ど何も見えなかつた艦前方の空間に、巨大な青白い光球が現れたのだ。

(なんだあれは!?)

「回避しろ! 取舵一杯!」

しかし、転舵も間に合わず、青く輝く粒子が艦全体を包み込み駆逐艦“霧雨”と僚艦は舳先から見えない何かにめり込んでいくようになつた。

光の中へ消えていった。

強烈な光だつた。芹沢たちは、目をやられぬよう腕で顔を隠しながら異変が過ぎるのを待つしかなかつた。

どれくらいの時間が経つたのだろう。

漂流兵たちも謎の光体にやられてしまつたのだろうか。

艦橋からも視認できた発光信号はもうなかつた。

「各班、状況を報告！」

艦長の指示を受け、各班のリーダーが部下の安否を確認する。

そんな中、ふと電探に目をやつた通信長はぎょっとした。

一瞬前まで何も捉えていなかつたはず電探に、突如無数の光点が現れたのだ。

「ぜ、前方に艦影！」

通信士が叫ぶように報告する。

彼らを待つてゐたのは、救助を待つ同胞ではなく、見たこともない国籍不明の艦隊だつた。

芹沢が通信を命じる間もなく、謎の艦隊は霧雨に向けて砲撃を開始した。

うち、一発が霧雨に従属してゐた僚艦に命中する。後甲板で爆発が起こり、黒煙が上がつた。

「敵はまだ引き上げていなかつたのか！？」

水上戦闘用意！主砲攻撃始め！！

こちらの戦力は霧雨を含めて駆逐艦3隻、向こうは10隻を超えてゐる。

状況は圧倒的に不利であったが、交戦するよりほかに道はなかつた。

主砲と魚雷を駆使し、応戦しつつ離脱を図る霧雨であつたが不運にも、状況を更に悪化させる事態が起きた。

「嚴重警戒！繰り返す、嚴重警戒せよー！」

霧雨前方に大型の巡洋艦が現れたのだ。

先ほど交戦した駆逐艦隊とは兵装も装甲も比べ物にならない。霧雨の10cm砲では、敵艦の強固な装甲に殆どダメージを与えられない。

魚雷もほぼ撃ち尽くした。

ジグザグに回避運動をしながら距離を取るうとするが、敵艦の速度と長射程のために砲撃可能距離から逃れることはできなかつた。

巧みな操艦技術で主砲弾をぎりぎりで回避してきた芹沢だったが、とうとう距離を詰められてしまつた。次の斉射で確実に本艦は撃沈される。

ここまでか。

その時、本艦のレーダーが別の艦隊を捉えた。ほぼ同時にその艦隊旗艦から入電があつた。

「我々は第零遊撃部隊。これより貴艦隊を援護する。」

先頭を行く、敵巡洋艦よりさらに一回り大きな戦艦が砲撃を開始。驚異的な命中率で次々に砲弾を叩き込んでいく。わずか数分で決着はついた。

その後、謎の艦から再び通信があつた。

本拠地まで帰投するので同行願うという。

燃料も底をつきはじめていた我々は情報を求めて彼らに同行することにした。

そして、彼らの本拠地で芹沢を待ち受けていたのは、数ヶ月前に新

銳艦と共に姿を消した

士官学校時代の先輩、磐木正一少将だった。

彼の説明によると、この世界は我々が生まれた次元とは異なる平行世界であり

その軍事技術は元居た世界とは比較にならぬほど進歩しているのだそうだ。

戦場では、機銃並みの連射が可能な大口径砲、おそらく100年後の世界でも実用化されていないであろう光学兵器、音速で海中を駆け抜ける魚雷などが飛び交っているという。列強各国がそのオーバーテクノロジーをぶつけ合い、霸権を巡り争っているらしい。

問題なのは、最近開発された、莫大な出力を発する特殊機関を搭載した「超兵器」である。

とりわけ常識はずれの力を持つこれらの艦船は、何かの拍子に次元に穴を開けてしまうらしい。

我々が転移したのも超兵器機関の暴走が原因のようだ。

それを切欠に、世界が複数あることを知った列強各国は

異次元への侵略を開始すべく超兵器機関の更なる改良を始めた。

当然、我らが祖国・日本が存在する次元もその標的となる。

“ 第零遊撃部隊 ”

国籍を持たない、世界各国から集つた元軍人、諜報部員、学識者などが構成する

レジスタンスである。世界を滅ぼす力を持つ超兵器を全て破壊することが目的であり、

事情を知った磐木も帰還を諦めこの世界で戦うことを決めたという。

私達は、日本を守るため第零遊撃部隊に参加し超兵器を破壊することを決意した。

彼らの支援の下、我々は超技術で作られた兵器を習熟し、対超兵器戦で次々と功績を挙げていった。

幸運にも超技術の運用と指揮官の才に恵まれていたらしい。ほぼ全てのクルーが転移者である、私が率いる部隊はいつの間にか「超兵器狩り」として第零遊撃部隊内でも知られるようになっていた。

何年も超兵器を探し続け、撃破し、我々はとうとう最後の超兵器を追い詰めた。

氷山に囲まれたその海域で、最強の超兵器に戦いを挑んだのだ。

超巨大戦艦「ヴォルケンクラッシャー」。

禍々しいほどの巨体、易々と電磁防壁を突き破るレーザー兵器、大口径砲。

そして大陸すら沈めるといわれる艦首波動砲。

ここにたどり着くまでに、強力なレーザー砲台や量産型超兵器の猛攻を潜り抜けてきた芹沢の戦艦、伊耶那岐^{いさな}は既に手負いの状態だった。

戦況は絶望的だった。だが、命に代えても奴を沈めなければわが祖国は、家族は、仲間たちは、あの悪魔に焼き尽くされてしまう。

芹沢の号令が響いた。

そして

数時間にわたる激闘の末、災厄の化身たる摩天楼に崩壊の時が訪れた。

既に右舷艦首は崩落、氷点下の海へ落ちてゆく乗組員の姿が見えた。
50cm砲の連射で叩き潰された兵装は次々と誘爆を起こす。

内部で一際大きな爆発が起り、右舷はほぼ完全に吹き飛んだ。
崩落部から海水が流れ込み、その舷側を天に向かたとき
ヴォルケンクラッツァーの船体が激しく発光を始めた。

それは、確かに数年前、芹沢たちをこの世界に導いたあの光だった。

「青い光だ！」

「日本に帰れるのか！？」

歓喜に沸く、元帝国海軍の将兵達。

「全艦に通達！

光源に向けて進路を取れ！」

日のくらむような光。青白い太陽。やはりあの時と同じであった。

意識を失っていたようだ。

今しがた究極超兵器との死闘を繰り広げた氷海は消え去り、
穏やかな夜の海が広がっている。既に転移は終わっていた。
海の向こうに島影が見える。

「現在位置を確認せよ」

モニターに表示されている地形は紛れもなく日本だった。
今、見えているのは横須賀の海岸であった。

「これより我々は横須賀港に帰投する！」

夢にまで見た祖国を目の前に、乗組員全員の胸は高鳴っていた。

最大戦速で見慣れた軍港へとひた走る。

横須賀の夜景が見えた。転移前とは見違えるほどの眩さだ。
無理もあるまい。我々が帰還するまでに何年も経っているのだ。
きっとあの時は何もかも状況は変わっているのだろうが、
煌びやかな景色は、日本が発展を遂げている証拠であらう。
今はただ喜びたい。

「横須賀に電信。

こちらは帝国海軍所属艦“霧雨”艦長、芹沢智治。

入港を許可されたし。」

さて、すぐには軍部にこの状況を信じて貰えないだろうが、
本艦の装備や乗員の証言があれば、それほど説明は難しいものでは
ないだろ？

そして何より、あの戦争の行方が気になる。
だが、どんな結果になろうと、異世界から持ち帰った技術の数々が
日本の発展に役立つことは間違いない。
願わくは、再び我が艦隊の武力を振りかざすようなことにならなけ
ればよいが…

しかし、そんな芹沢の思案をレーダー監視員の怒鳴が遮った。

「ミサイル接近！本艦に向かって突っ込んでくる…！」

「ミサイルだと！？迎撃準備！」

両舷に配置された無数の対空機銃と高性能迎撃システムで
初弾は直ちに迎撃された。

あのミサイルは明らかに本土から放たれたものだ。
日本は既に敵国の植民地になってしまったのか？

馬鹿な！当時の技術力から考えて、

たった数年でミサイルを実用化できる国など存在しない！

素早く思考を走らせる芹沢だが、その間にも本土からの容赦ない攻撃は続く。

沿岸の砲台から一定間隔で放たれる砲弾が伊耶那岐の船体を激しく揺さぶった。

防御重力場の効果で、一発々々が与える損傷は大きくないものの、積み重なればヴォルケンクラッサーとの激戦で既に満身創痍の伊耶那岐にとっては十分脅威となる。

「転進180度！今はこの場を離れる！」

「航空機接近、数12機！」

明らかに帝国海軍のものではありません！」

スクランブル発進した攻撃機が襲い掛かる。

両翼から放たれたミサイルが伊耶那岐を捕らえた。

攻撃と同時に超音速攻撃機は伊耶那岐から距離を取り、第一射に備え体制を取る。

「仕方がない。イージスシステム起動！

目標、敵攻撃機部隊。対空ミサイル、攻撃始め！」

水雷士が目にも留まらぬ速さで入力装置を叩く。

電探のモニター上に四角いブルーのフレームが現れた。

慣れた手つきでタッチパネルになつてているモニターに指を滑らせフレームを動かす。

不明機を示す黄色いアイコンの集団がその枠に入ると同時に、座標・諸原入力が一瞬で完了した。

「目標、全機ロックオン！」

「撃ち一方始めーーー！」

甲板中央のVLS十数セルが開き、爆発音と共に炎を吹き上げた。空に舞い上がったミサイルは、一瞬で超音速まで加速しヒット・アンド・アウエーの戦法を取るべく、接近・離脱を繰り返していた

攻撃機隊に食らいついた。

慌てて急加速し回避を試みた機は、円を描くように先回りしたミサイルの直撃を受け、チャフによるソフト・キルに成功した機は伊耶那岐が放ったパルスレーザーの弾幕によって全て撃墜された。

「ECM展開、増援が来る前に撤退するーーー！」

芹沢たちは転移した座標点に戻ることを余儀なくされた。そこには遅れて転移してきた高天原が待っていた。

この世界は本当に我々の生まれた世界なのだろうか。

今は、高天原南端のH LGに入渠し、

傷ついた船体を修復するよりほかにできることはなかつた。皆、無言だつた。

第1話・時空転移艦隊（後書き）

まず、プロローグから続きを書くのに
1月以上もかかつてしまつたことをお詫びします。
ドック艦はウォーシップガンナー2に登場します。
異世界に転移し、補給を受けられる国がない芹沢たちが
戦い続けるためにどうしても必要だつたので。
なぜ彼らが超兵器を保有しているのかは
後回しにさせてください…
コードギアスの設定資料集とか出ないかなあ。

第2話・異界の戦場

皇歴20XX年 7月15日

高天原中央・軍本部司令センター27F大会議室

「日本で得た世界各国の資料です。…」覗ください」

「……何なんだこれは…！」

異世界から帰還した第零遊撃艦隊の面々を待ち受けていたのは思いもよらぬ日本からの先制攻撃だった。その真意を探るべく、高天原は数名のエージェントを秘密裏に日本に送り込んでいたのだ。ここに、第零遊撃艦隊の司令塔たる超高層ビルには、エージェントの調査報告を受けるため

首脳部を始めとする各艦艦長以下上級士官らが集められていた。だが、エージェントが持ち帰った資料を見てみなは驚愕の声を上げた。

「栄光のブリタニア戦記」と題された書物に記されていたのは信じがたき祖国の惨状であった。

無残に中腹を抉られ、大部分を採掘施設に覆われてしまった富士山、爆撃を受け廃墟と化したノートルダム大聖堂が

“偉大なるブリタニアの勝利の歴史”として紹介されていた。

「こちらは、エージェントが撮影した現在の新宿の町並みです」

続いて空間投影式プロジェクターに浮かび上がった日本の映像は更に生々しいものだつた。

それはスラムと化した新宿。

破壊の限りを尽くされたビル群の中で
襟襷切れのような服を着た日本人たちがひしめき合つて生活をして
いた。

第2次大戦中に空襲で焼け野原になつた都市の光景が、
時代を超えて再現されたかのようだつた。

かつて芹沢が戦友たちと繰り出した新宿の町並みは見る影もない。
伊勢丹デパート、パーラー、劇場が立ち並んでいた映画の街の
面影はどこにもみられなかつた。

それが時代の流れだけによるものでないことは明らかであつた。

「どうこうことだ、内戦でも起つたのか！？」芹沢が思わず声を
上げる。

「落ち着いてください。重要なのはここからです。

どうぞほかの皆様も落ち着いて聞いてください……」

情報士官が手元のダイヤルを操作し、画像を切り替える。

豪奢な内装が施された鉄道から見る風景、

一方は先ほど見た廃墟と化した新宿。反対側の窓から見る景色は
それとは対照的な近未来的都市であつた。真新しい超高層ビルが立
ち並び、幹線道路が隅々に張り巡らされ、至る所に太陽光発電パネ
ルが点在しており

芹沢が幼いころに読んだ空想化学の本を思い起させた。

丁度、2つのエリアがモノレールの路線を境界として仕切られてい
るような形だつた。

「何故隣接した地区の開発レベルにこれほどの差があるのか？」
元ドイツ軍駆逐艦長がもつともな疑問を呈した。

「それは……

開発の進んだエリアは日本を占領した国の移住者が住む租界となつてゐるからです」

「占領…だと…？」

「そして、荒廃した地区はゲットーと呼ばれ日本人が住むスラムとなつています。

日本だけではありません。既に我々が祖国とする国が多くがブリタニアなる

謎の大國に支配されてしまつたのです…」

情報仕官がプロジェクトに世界地図を投影し、改めて要点を述べた。子供のころから見慣れたメルカトル図法の世界地図。伊耶那岐の艦長室に掲げられているものと寸分違わぬ地形が描かれている。ただひとつ違うのは、大半の陸地が一色で塗りつぶされているということだ。北アメリカ大陸に大きく「BRITANNIA EMPIRE」の文字が刷られている。

- ・日本が既にブリタニアという超大国に支配された。
- ・他の先進諸国も軒並み侵略されてしまつた。
- ・今が皇暦20XX年という時代である。

以上がエージェントの調査によつて導かれた結論である。

その現実は、帰国を夢見て戦い続けてきた歴戦の艦長達を打ちのめした。

思考が真っ白になる。芹沢が膝を突いた。

「艦長！」

副長の磐木が駆け寄る。

甘かつた。

やはり我々が戻ってきたのは第2次世界大戦時の日本ではなかつた。

冷静になつて考えれば、計算も何もあつたものではない、偶然起こつた現象で

あの日、あの場所を選んで転移しようというほつが非現実的な話だつた。

だが、そんな2人に歩み寄る大柄な男がいた。

元米軍少将、ウォーレン・J・カーネルである。

「Stand up,ミスター・セリザワ。」

まだ望みを失うには早いぞ。全てが終わつたわけではない。
確かにここは俺たちが戦つた、あの日本ではないのかも知れない。
しかし、見たまえ」

カーネルは会議場奥の壁、高天原の広大なレーダー範囲を示す
巨大な電子パネルを指差した。オレンジのラインで形作られた地形
図と経緯線の中に、見覚えのある島国が存在している。

大きく4つに分かれた南北に長い列島。独特な地形を持つその国は、
紛れもなく日本であった。

「俺には双子のようなこの世界が
血を分けた兄弟に思えてならないんだ。」

我々の時代に残してきた約束を果たすときが来たのだよ」

約束……

そうだ。我々には各自に果たすべき約束があつた。
仲間、祖国、家族を守り戦い抜くという使命を背負つていた。
しかし、それは運命のうねりに巻き込まれ、ついに果たされること

はなかつた。

あの日、フィリピン沖では漂流兵たちが時空転移の後も
芹沢の助けを待ち続けたことだろ？

国の命運を賭けた時代に立ち会うこともできなかつた。
様々な思いが頭をよぎる。

ならば

せめてこの時代の兄弟たちが住む祖国を奪い返すことで
その約束を果たそうではないか。

我々が生まれた昭和の日本。皇歴といつ時を生きる日本。
両者にどれほどの違いがあるというのか。

『その通り。』

その時、静かな重みのある声が響き、大会議室のドアが開いた。
3人の老紳士の姿があり、その場にいた全ての将校たちが直立の上
敬礼した。

磯崎忍いそさきのぶ

モーゼス・E・アーカンソー、
ルートヴィッヒ=ハイドフェルド、

第零遊撃艦隊の行動方針は、高天原の頭脳たるこの3人の元帥に
よつて決定される。

そのうちの一人、磯崎忍が宣言した。芹沢と同じく真っ白な詰襟の
軍服に身を包み、

右肩から胸に金のモールを下げている。

「本日、第零遊撃艦隊は神聖ブリタニア帝国に宣戦を布告する。」

会議室全体がどよめき、磯崎が片手を挙げてそれを制する。

「協議した結果、先ほど決定した。

現在、我らが祖国は想定外の非常事態に見舞われている。我々が生き延びるためにも帰還すべき国家を取り戻す。」

続いて、モーゼスが語りだした。年季の入ったワーキングカーキの軍服が戦歴の長さを物語っている。器用に咥えたコーンパイプはアメリカ海軍時代からの愛用だ。

「ただ生き延びたいのであれば、大国に保護を求める」ともできる。

だが私はブリタニアなる侵略者に迎合する気は毛頭ない。選択肢は一つ。奪還あるのみだ。」

H-LGの特殊空母で会議のライブ映像を見ていた米海兵たちが雄叫びに近い歓声を上げた。

「さて、本題はここからだ。

我々の保有する兵器は世界最強と言つていいが、所詮はひとつの軍隊。

大国を相手に戦争を仕掛けてもやがては物量に押しつぶされよう。半端な兵力では押し負ける。

それは絶望的な戦力差を覆してきた諸君が良く知つてているはずだ。そこで高天原に残存するレアメタルの在庫を超兵器の復元に充てる。

」

「超兵器を復元！？」再び場内がざわつく。

「そうだ。第零遊撃部隊本隊から離れた我々は、向こうのように無尽蔵に艦船・兵装を建造することはできない。何らかの方法で補

給を受けぬ限り、

高天原に残された資材のみで帝国と戦い抜かねばならないだろつ。仮に補給路を確保しても一部隊と国家の差は歴然。

物量の差を跳ね返すには、生半可な攻撃を受け付けぬ無敵の艦が必要不可欠なのだ。」

「量より質、といつわけか……」

「しかし、我々は超兵器をこの世から葬るために戦つてきたのではなかつたのか」「では俺たちの故郷はどうなる?」

普段は冷静な幹部たちも動搖を隠せない。彼らは超兵器が引き起こす災厄を食い止めるために戦つってきたのだ。その根源を蘇らせるというのだから当然だろつ。

「つむ。君達が言いたいことは分かる。

世界を滅ぼす力を持つ超兵器を蘇らせることは、本来ならば絶対の禁忌だ。

しかし、モーゼス君が述べたように、我らには不沈艦が必要なのだ。一挺の機関銃を携え、幾万の騎士に戦いを挑まねばならない。苦しい戦いになるだろう。

だが、祖国を解放し、超大国ブリタニアへの抑止力となる。それができるのは君たちだけだと信じていいる

穏やかな口調で述べたのはルートヴィッヒ元海軍大将。ドイツ海軍の象徴たる黒を基調とした軍服と、丁寧に手入れをされたカイゼル髭が印象的だ。

「皇帝ルイツ・ラ・ブリタニアか……」

報告を聞く限り、まるであの男の亡靈が蘇つたかのようだな

「ふむ。」の地図には我がアメリカ合衆国がないようだが、
なあに、無いなら作るまでだ

「日本に魔神の怒りが降りそぞぐ日も近かひつ」

三者三様の決意の言葉でその場は締めくられた。

祖国奪還という新たな作戦目標を掲げ、

第零遊撃艦隊は再び戦いの海原へと赴くことになったのだ

皇歴20XXX年 9月8日

「伊耶那岐」応接室

「……以上が、現在の我々が置かれた状況です。」

「とても現実とは思えない話ですが…

貴官らを見る限り信じるしかなさそうですね。」

そう言つと男は、応接室を見回す。ゼンマイ式の掛け時計やアンティーク趣味の白熱灯など、博物館に並んでいてもおかしくない古風な調度品の中、それらに紛れるように置かれた小型ディスプレイが、伊耶那岐艦橋から送られる周辺海域の映像・海流・海底地形といったデータを表示し続けていた。周辺のカメラ映像はデジタルビジョンという高精度な映像解析システムを通してあり、いかなる悪天候でも晴天時のような視界を確保できるという。ローテクノロジーとオーバーテクノロジーが混在した空間は、彼らが異世界からの来訪者であることを証明していた。高天原到着までの間、芹沢はマ

ルセイユ艦長アダルバート＝ウエグナーを伊耶那岐の応接室に招き
自らの状況を説明していたのだった。

「宣戦布告に関しては、内政省に一応正式な書類で通達しましたが、
まだ反応はありません」

「無理もありませんな。この世界にはブリタニアに抵抗する組織が
大小含めて無数に存在します。内政省にもその手の声明は山ほど来
ているのでしょうか？」

「津村二等兵、入ります」

「ンンン、ヒドアを叩く音が聞こえた。

まだ学生らしさが残るその海兵は部屋に入り敬礼をした。

「まもなく高天原に到着します。恐れ入りますが艦橋までお越しく
ださい」

「貴官らの本拠地が移動式だとは聞いているが

こんな太平洋の真ん中にあるとは、やはり信じがたいものだ…」

「よつこそ我らが母港へ。到着早々申し訳ないのですが、センター
で首脳がお待ちです。

是非貴方のお話をお聞かせ願いたい」

伊耶那岐の汽笛が冷たい海の大気を震わせる。

朝もやの向つにはH-LGの巨大なドッグが見え始めていた。

(…次は、テロリストによる海兵騎士団襲撃事件の続報です。)

朽ち果てた倉庫には1台の巨大な車両が停まっている。昆虫を思わせる全体的に丸みを帯びたフォルムが特徴的である。十数人が共同生活できる広大な居住空間を持つ、その車の内部では数人の男女が小型ディスプレイが映し出すニュース報道に見入っている。何らかの組織に所属しているのだろうか。彼らは皆、制服らしき黒のジャケットに

黒の帽子を身に附けている。

(……現在のところ、いずれのテログループからも犯行声明は出でおりません。

通信記録からテロリスト側指揮官との会話に“ゼロ”という単語が確認されたことから、

海兵騎士団は黒の騎士団による犯行の可能性があるとして周辺海域の捜査を進めており……)

「おーおい、なんか俺たちのせいにされてんだ……」

体格の良い青年が呟いた。

「構やしねえよ。俺たち黒の騎士団の名も上がるつてもんだ。」

と、ジャケットの胸元を開き、だらしなく着込んでいる顎鬚の男が受ける。

人の良さをもつた先ほどの青年とは違い、こからは幾分柄が悪そうだ。

(……こからは、撃沈された空母エクスカリバーから最後に送られた映像と、現場に急行した友軍艦艇が捉えた現場写真です。)

「画面が切り替わり、テロップによる解説と共に複数の画像が表示された。
異形の巨大戦艦が発光する瞬間と燃え盛る空母の残骸が写されている。

「なんだあ、こりやあ。軍オタの友人が持つてた大昔の戦艦のプラモそつくりだな。

ナイトメア全盛のこの「」時世に、わざわざ戦艦でブリタニアに挑もうつて奴がいんのかね。」

「でも、この兵器は凄えぜ。空母を一撃で沈めたんだろ?
こいつらが黒の騎士団に入つてくれりやあ、ブリタニアなんか楽勝かもな。」

「ちょっと、2人とも暢気なこと言つてる場合じゃないわよ。
やつてもいないテロの容疑を押し付けられちゃ堪らないわ。ただでさえ捜査の目を

誤魔化すのに苦労してるので。キヨウトのレジスタンスリストにも載つてないし、こんな怪しげな連中信用できるわけないじゃない。」

赤髪の少女が2人に突つ込む。意志の強さを感じさせる大きな青い瞳が特徴的だ。

「……いや、ここはひょっとすると使えるかもしねんな。」

「ゼロ…？」

ここにきて、一人ソファに腰掛けっていた男が初めて口を開いた。
若者と思われるが、その声には不気味な淒みがある。

組織のメンバーに彼の正確な年齢を知るものは居ない。

黒いマスクで頭部をすっぽりと覆ってしまい、誰にも素顔を見せないからだ。

風格や外見からして、彼が恐らくこの組織のリーダーなのだろう。
他の3人のようにジャケットは着ておらず、異様に襟の高いマントを羽織っている。

(ククク…)

これは面白い。

ナイトメア、黒の騎士団、そして次なる力が俺の前に転がり込んでくるとはな…

必ず手に入れてやるさ。ここつの力で……！）

他のメンバーは報道された艦の武装を他国的新技術程度にしか捕らえていなかつた。たった一枚の不鮮明な写真では無理も無かろう。だが彼は違つた。天性の嗅覚で嗅ぎつけたのだ。狂つたように膨張した、異界の力。その存在を。

“少年”の眼が仮面の下で紅く輝いた。

第2話・異界の戦場（後書き）

また更新が遅くなつて申し訳ありません…

ずいぶん回想が長くなりましたが、次回からお話が動き出す予定です。

また、「ルルーシュは出ない」とか言つときながら、少しだけ出してしまいました。

重ねてすみません。

本編も新兵器が登場したり、黒の騎士団がパワーアップしたりで益々面白いことになつてますね。

某掲示板によると、続編があるという噂ですが本当なんでしょうか。確かに今クールでは決着がつきそうにありませんが…

第3話・風神、荒野に舞い降りる

皇歴20XX年 9月8日 09:22

軍本部指令センター 20F ルートヴィッヒ元帥私室

エレベーターを中心には、円筒形の指令センター20階のワンフロアを3等分した広大な居住スペースは三元帥の執務室を兼ねている。今この部屋では芹沢智治が立会い、ISF艦長アダルバート＝ウエグナーと

ルートヴィッヒ＝ハイドフェルド元帥の面会が行われていた。

第零遊撃艦隊が超大国ブリタニアの支配する異界に転移して2ヶ月が過ぎた。その間、一度にわたるブリタニア軍との交戦、宣戦布告を行つたものの、当のブリタニアに彼らの存在を知るものはいなかつた。それらは多少メディアを騒がせたようだが、いつしか大国が抱える数ある出来事に埋もれてしまい、謎の艦隊は人知れず太平洋に孤立している。その意味では、第零遊撃艦隊は未だ次元の海を彷徨つているといえるのかもしれない。そんな彼らの領域に、今日始めて異界の住人を招きいたのだ。二つの世界が本当の意味で邂逅したのは、今この時なのかもしれない。

「遠いところを」苦労様でした。どうぞお掛けください」

ルートヴィッヒは一人に席を勧め、自分もソファに腰掛けた。
「お目にかかるて光栄であります。

まずは、改めて貴軍に窮地を救つていただいたことを感謝します。」

ウェグナーは敬礼をし、芹沢とルートヴィッヒに礼を述べた。

「とんでもない。目の前の敵を排除したまでです」

「そのとおり。我々は既にブリタニアとは交戦状態にあります。あちらさんがどう思つているかは判りませんが」

「この上、艦の修理までしていただき、感謝の言葉もありません。昨夜の交戦で機関にも深刻なダメージを受けており、そのままでは帰投はおぼつかなかつたでしょう」

「現在H-LGにて急ピッチで修復作業が行われています。よろしければ、それまで貴方がたISFについてお聞かせ願えませんかな? もちろん差し支えのない範囲でかまいません」

「ええ。もちろんです」

ウェグナーはISFが組織された理由と、作戦行動中に襲撃を受け伊耶那岐に救助されるまでの経緯を説明した。

神聖ブリタニア帝国は、現代に蘇つた絶対王政を執る国家である。現皇帝、ルイツ・ラ・ブリタニアが皇位を継承した時期からブリタニア帝国は危険な兆候を見せ始めていた。

交戦中の国と締結していた一時休戦協定を一方的に破棄。不意打ちに近い形で、海底資源の権益をめぐつて争っていたその国を属領化した。また、レアメタルの軍事利用量を定めた国際軍縮協定も離脱。次々に近隣諸国を無視した強国化を図るブリタニアは、それらに対する各国の抗議も半ば無視。大国の振る舞いに世界は危機感を募らせた。

そして時代は皇暦2000年代に入。ついにブリタニアは先進的科学技術と強大な軍事力を背景に世界規模の領土拡張戦争を開始したのだ。標的となる国には露骨な経済的圧力・領空、領海侵犯などの挑発行為を行い、開戦に追い込む。そうして次々に抵抗する国々を圧倒的武力で蹂躪し領土・権益を奪い取つていった。

ISF（International Secret Force）はブリタニアの暴挙に反発する国々の財閥・コングロマリット・資本家らが、莫大な資産を投じて秘密裏に組織した私設軍である。本来は植民地の奪還、駐留するブリタニア軍の撲滅が任務であった。しかし現実には、大国との圧倒的戦力差を覆すことができず、思うような戦果を上げることができないまま、他のレジスタンスの支援をするのがやっとだった。

「ふむ。この世界や貴方がたの状況はよくわかりました。ものは相談なのですが、いかかでしょう。」

貴軍と我々の間で取引をする気はありませんかな」

「取引？」

「ここに来る前にもお話しましたが

今現在、本艦（高天原）に残された物資は食料約半年分。動力は全ての艦に原子炉・核融合炉を搭載しているため問題ありませんが、

鋼材の在庫に関してはブリタニア軍との交戦を想定し、

弾薬類の補給・艦船の修理に全て充てることになっています。

既に建造が終わつた超兵器を除き、大量に鋼材を消費する艦船の新規建造は不可能です。

守るにせよ攻めるにせよ、一刻も早い補給路の確保が私たちの急務なのです」

改めて自軍の置かれた状況を説明する芹沢だったが、ウェグナーは非常に驚いた様子で聞き返す。

「核融合炉ですか？」

「？　はい。

無限に近いエネルギーを生み出すことができます

「驚きました。こちらの世界では核エネルギーの研究はほとんど進んでいないのです。

原子炉の基礎理論があるにはあるのですが、放射性物質の処理がネックで実用化されませんでした。太陽光発電やエナジーフィラーが主流の今では実現しようと考えるものも居ません」

「エナジー…フィラー？」

「動力源のようなものでしょうか。我々の世界では聞いたことがあります」

今度は芹沢が不思議がる。

「ふむ。やはり、そちらの世界と我々の科学は異なる進化を辿ったのでしょうか。

放射能に関しては」心配無きよう。向こうの世界で生まれた原子力機関は全て鉄壁の防護が施されています。撃沈した敵艦船から引き上げた機関をそのまま使用することも珍しくありません。原子炉が破壊され、放射能が漏れ出す以前に船体そのものが保たんでしょう。話は戻りますが、我々は壊滅状態に陥った貴艦隊に代わり海上戦力を提供し、皆さんに物資とこの世界の情報を提供していただくというのはどうですかな。

ともにブリタニアと戦う同志として、同盟を結びたいのです。

第零遊撃艦隊の力はマリアナ海で一々覧頂いたはず。
悪くはない条件だと思いますぞ」

ルートヴィッヒが具体的な条件を提示した。

「本艦隊は、あちらの次元では列強各国と文字通りの戦争を行つてきました。守りに徹するだけではなく、艦隊戦は勿論、制海権奪取、陸軍の上陸支援、通商破壊と言つた世界規模の攻勢に出ることが可能になりますぞ。」

「……結構なお話ですが、私の一存では決めかねます。

一度マルセイユに戻り、ISF本部の指示を仰ぎたいのですが」

「判りました。良い返事を期待していますぞ

今日のところは来賓用宿舎にお泊まりください」

「ありがとうございます。兵員の疲労もピークに達しているので助かります」

ソファから立ち上がり再び敬礼をする。

「その前にドックに立ち寄らせていただきたい。我が艦の状態を見せておきたいのです」

「お送りします。既にマルセイユの修復も終わっています」とう。

芹沢も立ち上がる。

「はは、冗談を。この島に到着して半日も経つていませんよ」「H-LGには優秀な技術者と設備があるのであります。きっと驚かれるでしょう」「はあ……」

訝しがりつつもウェグナーは芹沢と元帥私室を後にした。
ルーヴィッヒは再びソファに深く座り、部隊の作戦方針について考
えを巡らす。

恐らく彼らは我々と組むことになろう。

彼らの背後には潤沢な資金を持つ組織がある。

成果を挙げれば継続的な支援も受けられそうだ。

問題はその後の戦略だ。大国ブリタニアが支配する領土は余り
にも広大だ。

どこから切り崩していくべきものか。

アジアか、歐州か

ブリタニア本土、もとい南北アメリカ大陸進攻は大仕事になるだろ
う。

モーゼス元帥や米軍將兵達には済まないが、アメリカ独立は恐らく
最後になる。

道のりは険しい。

ジリリリ……

そのとき、古風な装飾が施された内線電話が鳴った。

「うむ、私だ。……何！」

磯崎元帥とモーゼス元帥は？

もつそぢらに？ わかつた。私もすぐに向かつ」

ガチャリと受話器を置き、急いでコートを羽織った。

「いかん、まずいことになつた……！……」

H LG 第3号ドック

「今日のところはゆっくりお休みください。

後ほど宿舎まで部下を迎えて寄越します。では明朝〇九〇〇に

ウェグナーは全体をすっぽりと屋根で覆われた巨大な軍港に戻ってきた。

高天原南岸がそのまま港になつたH LGは、多数の船渠に分割されており、順に番号が大きくペイントされている。それぞれが幅の広い道路で結ばれており、各艦で兵装や設備を融通しあうのに都合がよい。

ジープで2車線道路を飛ばし、マルセイユの入渠する第3号ドックに戻ってきた。少し離れた5号ドックには伊耶那岐の巨大な船体が見える。上陸時はじつくり眺めている余裕もなかつたが、こう見てみるとやはりその大きさは尋常ではない。しかも、超兵器と呼ばれる艦の大きさは、伊耶那岐よりさらに何倍もあるという。本当にすると、動く要塞だな……そんなことを考えていると、艦長の姿を認めた副長のエドワードが声をかけてきた。その後ろでは乗組員たちが困惑したような表情で待つていて。

「艦長、大変です。マルセイユが…」

「どうした、やはり修復不能な箇所があるのか」

「すっかり元通りになつてるんです」

「なんだつて！」

タラップを駆け上り甲板を見渡す。

完全にへし折られたはずの速射砲やハープーン発射機^{キャニスター}が元の直線を描いており、

天井の白色ライトで鈍く輝いていた。

VLSSは？　ナイトメアの肉薄攻撃で大半が抉り取られてしまったはずだ。

後甲板に移動するウェグナーだが、そこで見たのは、整然と敷き詰められた美しい正方形のプレートだった。

「兵装だけではありません。船体はもちろん、機関・電気系統も完全に修復済みです。

我々全員を外に出したと思ったら、巨大なクレーンで船全体を船台まで運び、

区画ごとに分解してしまったんです。後は修理の終わった各区画を大きなプラモモデルのように組み立てて…ご覧のとおりです。あつといつ間でした。

立ち会っていた自分にもまだ信じられません……」

正直なところ、これまでウェグナーの心は完全にこの状況を飲み込めてはいなかった。

広大な人工島や巨大戦艦の数々を目にして、どこか映画のセットやテーマパークのアトラクションを見ているような非現実感を拭えなかつたのだ。しかし、長年戦場を共にした艦の変貌を目にしたことで、ようやくこの不可思議な現象を受け入れたのだ。

「神の遣わした救いか…

「ドワード、本部と通信を開いてくれ」

その約1時間前

サン・ニコラス島

ロサンゼルス南西約120km

島のほぼ全域を砂とむき出しの岩盤が占める孤島である。

その小さな島に寄り添うように、数隻の艦艇が一定の距離をとつて単縦陣で航行していた。

「やれやれ、祖国を目の前にしてお預けを食らうとはな。ロスに繰り出して一杯やりたいもんだ」

北米方面軍司令と超兵器アルティメイツトーム艦長を兼任するウオーレン・J・カーネルは愚痴をこぼした。高天原から遙か西、第零遊撃艦隊北米方面軍は偵察任務のためブリタニア本土近海まで遠征していた。彼らの歴史では、アメリカ合衆国、カナダ、ブラジル、メキシコ…複数の国家を抱えていたはずの大陸。誰よりも知つていたはずの祖国はブリタニアと名を変え、未知の大陸へと変貌してしまっていた。

「しょうがないませんよ、キャプテン艦長。電波妨害装置でレーダーに引っかかるないといつても、これ以上近づくと陸の人間に見つかります」

カーター通信長が答える。

カーネルが率いる艦隊は超兵器1、重巡洋艦1、駆逐艦1と数だけを見れば小規模なものだつた。それでも個々の艦が持つ力は、この世界の艦を遙かに凌いでいる。アルティメイツトームは現在、補助機関のみを使用し、全武装を停止した巡航モードで航行している。超兵器の全能力を引き出すには主要機関をフル稼働させ、戦闘モードに移行する必要があるが、それには一つ問題がある。

超兵器は戦闘中、広範囲に除去不能な特有のノイズを発生させる。無限に近い出力を発生させる特殊機関・光学兵器・それらに使用されるレアメタル・電探類から発せられる電磁波などの要素が微妙に作用しあうことで発生すると考えられているが、正確な原理はわかつていない。そして、超兵器はノイズとともに重要な機密も撒き散らす。主要機関を起動するたびに大規模な電波障害を引き起こすた

め、大まかな位置が容易に特定できてしまつ。実際、かつては彼らもノイズを手がかりに列強の超兵器を追い詰めてきた。このことから、超兵器は今の彼らにとって、おいそれと出撃させるものでない切り札と言つべき存在だった。

超巨大ホバー戦艦 アルティメイトストーム

第零遊撃艦隊が復元した超兵器のうち一隻である。

高天原に残存していたレアメタルと戦闘データで建造できた超兵器は一隻だった。

一隻は最強の攻撃力を誇るウォルケンクラッシュター。

もう一隻は、陸上での作戦行動も可能という広い移動範囲を持つホバークラフト型超兵器、アルティメイトストームだった。

「オーケー、俺は決めた。ブリタニアを倒した暁には口スで飲み明かすぞ！」

「こりにいる連中もご招待だ！」

「本當ですか！？ そんときや、みんな派手にやうづせ！」

「やつた、艦長のおごりだ！」

「へへ、樽ごと飲んでやるぜ」

「定期預金を解約しておいたほうが良さそうですね、艦長」「口座が消滅してなきゃいいがな」

アルティメイトストーム艦橋で談笑する乗組員。だが、そんな彼らを深海から見つめるものたちがいた。

(おい、上を見ろ！－！)

(艦影…！－！ 戦艦か、空母か？ そんなものがいるとは聞いてないぞ)

(なんてでかさだ！)

淡い緑色をした十体の機械兵は海面を見上げて驚愕した。軍事演習で深海からの潜入訓練に参加していたナイトメア部隊は、水中用ナイトメアフレームに乗り込み、ロサンゼルス沿岸から海底を進み、南西の島に上陸する予定だつた。だが、移動中に突然、一瞬前まで幻想的な青い光に満ちていた世界が闇に包まれた。頭部のファクトスフィアで周囲の状況を確認すると、いつの間にか真上に巨大な艦影が現れていたのだ。ほぼ無音に近いモーターでスクリューを回転し、ゆっくりと海底を泳いでいたこと。そして、ナイトメアの動力源であり、極めて高い静音性を誇るエナジーフィラーが、超広範囲の比較的大型の目標の探知を目的に作られた、遊撃艦隊のソナーに対応していなかつたこと。二つの不幸な偶然が重なり、ウォーレン艦隊は最後まで接敵に気づかなかつた。

(まさか、エリア1-1所属の艦艇を沈めた連中か！)
(テロリストどもがロサンゼルスに侵入したらまざいぞ)
(本隊に連絡、
（はつ）
先制を掛けるぞ。この距離なら魚雷も確実に命中する)

海兵騎士団所属の彼らはマリアナ海で起きた襲撃事件を知っていた。隊長の支持を受け、1機がすぐさま沿岸の騎士団本隊に向けエマージェンシーコールを発信。コックピットの操縦桿を引いた。動力源が出力を上げ、背負うように装備した2つのスクリューが回転速度を速めた。そして、肩口の発射管に魚雷を装填。コクピットのモニターに現れた照準が、黒い巨大な橈円を中心に捉えた。ガコン、ガコンという重い金属音が深海に響く。

標的は艦隊最後尾、駆逐艦“ラファイエット”

アルティメイトストーム艦橋

「ソナーに感、真下です！」

そのとき、音波探信儀のモニターに描かれていた単調なグラフが一瞬ぶれた。

わずかな反射音波の異常に気づいたソナー手が叫ぶ。

「敵潜か！」

「不明です。反応が小さく分析に時間が……!?」

魚雷10！ ラファイエットに向け発射されました！ 命中コースです！！」

「ラファイエットに通達！ 急げ、早く！」

回避を命じるまでもなく、最後尾の艦もソナーに魚雷を捕らえていた。

ラファイエットは急旋回を試みたが、至近距離で放たれた誘導魚雷は操舵に合わせ軌道修正し、艦底に4発が命中。アルティメイトストーム後方で爆音が轟き、海が爆ぜた。

「命中！」

「ソナー範囲を当海域に絞り、精度を上げろ！」

「了解……!? 何だよこれ！」

艦隊は知らぬ間に、赤い光点に取り囲まれていた。潜水艦を警戒し、ソナーの精度を下げ、索敵範囲を広げたことが仇となつた。

「ラファイエットの被害状況は！？」

「魚雷は艦尾に命中し、機関損傷。航行不能とのことです」

“マンハッタン”に通達！

ラファイエットを中心単縦陣を取りつつ、援護に回れ！」

「Aye, Sir！」

「向こうの応急修理完了まで時間は？」

「…返信ありました。約1時間です！」

矢継ぎ早に指示を出すカーネル。迂闊だった。超兵器は軍本部の許可なくしては交戦できない。今、まともに戦えるのは実質マンハッタン一艦のみだった。

（…敵は大型艦1、巡洋艦1、駆逐艦1です。うち駆逐艦を航行不能にしました）

“よくやった。我々もすぐそちらに向かい”

（足止めした1隻は俺たちで制圧するぞ！）

（イエス、マイローデ）

本隊との通信を終えると、十体の水中ナイトメアは円を描くように、徐々に距離を詰めながら一隻の艦艇を取り囲んだ。そして三方向から再び雷撃。あわせてマンハッタンも急発進し、魚雷の迎撃に移る。両舷の40mm機銃群から放たれる無数の火線が海を叩く。そのたび、海中で白い爆発が起きた。だが、兵装を水上・対空目標に特化したマンハッタンには有効な対潜兵装が存在しない。ラファイエットの防衛に徹するしかなかつた。

ラファイエットも艦尾の噴進爆雷砲から次々に機雷を投下し、艦首からレーザーを放ち、扇を描くように海面をなぎ払うが、船体を動かせないため死角が多い。ナイトメアも小回りを活かして浮かんでは沈みを繰り返すため、命中に至らない。撃ちもらした魚雷の1発が再びラファイエットを直撃した。

彼らは、そのサイズと機動性を活かしたフォーメーションで完璧な連携を取っていた。一隊は海面、もう一隊は海中からマンハッタンを、残った機は遠方のサン・ニコラス島沿岸に上陸し、機銃の射角外である真正面からラファイエットを狙い撃つ。複数の目標に放た

れる魚雷を捌ききれず、翻弄されるマンハッタン。そして、ナイトメア迎撃に手間取っているうちに、状況がさらに悪化した。電探に新たな光点が現れたのだ。

アルティメイツトーム艦橋

「敵増援出現！」

「ロサンゼルス港の艦艇がこちらに向かってきます！」「

カーターが叫ぶ。

「……高天原に繋げ！ 超兵器の起動許可を申請しろ！」「

カーネル中佐は、かつて止めを刺した怪物を、再び呼び覚ます覚悟を決めた。

「……こちら北米方面軍旗艦アルティメイツトーム。

総合作戦センター、応答願います……」

全兵装を停止している巡航モードのアルティメイツトームは応戦できない。高天原の返信が来るまでは指揮に徹するほかなかつた。

（先頭の艦はでかいだけで何もしてこないぞ）

（あれだけの大きさだと艦というより要塞だな）

“あれは後続に任せよう。俺たちだけじゃ骨が折れそうだ”

（わかった。そろそろこっちも片が付く）

（後は制圧するだけだな、先に行くぞ）

通信を終え、海中に舞うナイトメアのうち一機がラファイエット乗り込むべく、甲板に向けスラッシュユハーケンを放つた。既に、援軍のナイトメア数十機を乗せた揚陸艦はサン・ニコラス島の向こうまで迫っていた。

高天原17F総合作戦センター

「ウォーレン艦隊、ロサンゼルス近海で交戦中！」

「ラファイエット、右舷に被雷！」

引っ越し無しに飛び込んでくる情報の処理に追われるオペレーター達の声が、

切迫した事態を物語っていた。

第零遊撃艦隊のCICとも呼べる、CIC、総合作戦センターでは作戦行動中の艦すべての情報が集積され、戦況を把握することができ。また、高天原を中心とした全艦をネットワークで接続し、情報をやり取りするため、柔軟な作戦展開が可能であった。

幾列も並ぶデスク型コンソールでは、何人ものオペレーター達が情報収集にあたっている。壁面のほぼ全体を占める巨大モニター上では、ゆっくりとスクロールする世界地図を背景とし、多数のウインドウが各艦の座標・損害・戦況等をリアルタイムで表示していた。その中で、デフォルメされた艦影を表示するウインドウの一つが赤く染まっている。損害が警戒レベルを超えたのだ。

「ラファイエットは現在航行不能、敵は深海に潜んでいる模様です。マンハッタンが応戦中ですが、対空巡洋艦ではカバーし切れません」

三元帥は、インカムを装着したオペレーターの報告を受けながらモニターに見入っていた。一刻も早くこの非常事態への対処を取らなければならない。

「ラファイエットの損害が五割を超えようとしている。

お一方、この状況を如何とする」

「奴が一暴れすれば100%勝てる戦いだ。

同時にノイズに関する情報も捕まるだらうが

「致し方あるまい。いつかは訪れる状況だ」

「ジリ貧の今、一隻たりとも失うわけにはいかんでしょうね」

「いいだろう。君、ウォーレン艦長に伝えてくれ

モンスターを叩き起こせと」

「！？　了解」

指示を受け、オペレーターは艦隊旗艦と緊急回線を接続。

時空を隔てた超兵器戦は誰もが予想しなかつた形で幕を開けた。

口サンゼルス近海

全体を紫で統一した船体を揺らしながら、

二席の艦はサン・ニコラス島を目指し、ひた走っていた。

海兵騎士団所属
ナイトメア・キャリアー
騎兵輸送艦「デュラハン」

全長263・4m、最大戦速30・3kt

エクスカリバーのような航空機と兼用の空母ではなく、ナイトメアの輸送・発艦・揚陸に性能を特化したナイトメアフレーム専用空母とも言える新鋭艦だ。甲板には水上型ナイトメア発進用のカタパルト、艦底には深海型の発進口があり非常時の際にもすぐさま交戦に移ることが可能である。

同所属 駆逐艦「ハルバード」

全長157・2m、最大戦速39・7kt

主砲に小型のレールガンとも言える電磁砲を備えた駆逐艦。レールガンと性質は似ているものの、第零遊撃艦隊の艦艇に搭載されるものとは厳密なメカニズムは異なる。

旧世代の速射砲とは弾速も威力も比較にならない。砲としては小型

ながらその攻撃力は凄まじく、あらゆるミサイル・航空機を掠めただけで塵に変え、先の領土拡張戦争においても幾多の敵艦を葬つてきた戦歴を持つ。

「デュラハン」 艦橋

「作戦を開始する。アンダーウォーター、全機発進せよ。」

真っ赤な貴族服に身を包んだ将校は号令を発した。

「全機発進準備完了！」

「5番格納庫、全機発進せよ」

“アンダーウォーター全ユニット、潜行開始！ ダイブ・ダイブ・ダイブ！”

艦底の格納庫に作戦開始の号令が響き渡り、発進口からアンダーウォーター（ラファイエットらを襲撃した深海用ナイトメア）が次々と海中に泳ぎ出る。甲板のカタパルトからは

“デュラハン”艦長、ガイラー卿は、目標海域の半ばを過ぎたところで、当該海域の友軍と合流させるため、ナイトメア部隊を発進させた。最後まで低速の空母に乗せるより、水中・海上での高速移動が可能なナイトメアを先行させたほうが良いと判断したのだ。

足の速いハルバードにナイトメア隊を同行させ、交戦中の友軍と合流。一気に制圧する作戦だつた。

レーダーに反応せず、音もなく忍び寄る国籍不明の超大型艦。エリア11でエクスカリバーを沈めた艦、または同じテロ組織の所属艦である可能性は極めて高い。噂どおり、先遣隊がエマージェン

シーコールを送ってきた海域には友軍のレーダー反応しか存在しない。だが現実に、そのナイトメアは正体不明の敵艦と交戦中なのだ。

「たった三隻に新鋭艦一隻は大仰だと思つたが…
この状況はやはり異常だ」

ガイラー卿は顎鬚を捻りながら思案した。

「全機、ハルバードに追随しサン・ニコラス島に急行。
アンダーウォーター隊は作戦海域に到着次第、雷撃により敵艦を攻
撃、
グロースターはサン・ニコラス島より先遣隊を援護。停止した艦を
制圧せよ」

アルティメイストーム艦橋

「ナイトメア、ラファイエットに取り付けました！！」
「ロサンゼルスから出港したタンカーより、新たなレーダー反応及
びソナー反応多数！
数およそ40、ナイトメアの編隊と思われます！！」
「カーター、返信はまだか！」
「……来ました、軍本部より入電…」

「読みます！』

“超巨大ホバー戦艦アルティメイストームに通達。
交戦を許可する。

友軍艦艇を救助の上、直ちに海域を離脱せよ”

司令部からの交戦許可であつた。

その場に居る全乗組員は息を呑んだ。

「全艦に達する！」

これより、本艦隊は超兵器戦を開始する！

機関室、核融合炉起動、補助機関と接続せよ！

火気管制装置オンライン！

両舷全速、取舵一杯！

「Aye Aye Captain!」

全艦にたたましい警報が鳴り響く。核融合炉につながる浮上エンジンが始動した。

周辺海域全てのモニターには砂嵐が舞う。スカートから爆風が吹き出し、巻き上げられた海水がアルティメイトストームを包み込んだ。アルティメイトストーム後部、直径約50mの長さを誇る2つのファンが回転を始め竜巻を生み出す。その姿はまさに究極の嵐の名に相応しかつた。

かつて、カーネル達に葬られた風神は、長い眠りの末、異世界の西海岸に舞い降りた。

「208mmAGS、照準合わせ！」

「Aye , sir!」

「諸元入力完了！」

三角錐の砲台がコンパスのように円を描き、ラファイエットに砲身を向けた。

標的は甲板に降り立った緑の機械兵。

モニターに移るナイトメアは驚いたようにこちらを向いている。

「発射！！」

単装砲が吼えた。

しかし、放たれたのは徹甲弾ではなく精密な軌道制御が可能な誘導弾。

空中で飛び石のように軌道修正した砲弾は、ラファイエット甲板をぎりぎりを掠め、

ナイトメアを直撃した。

機械兵の残骸が宙に投げ出され、ボタボタと海に飛び散った。

その時

島の向こうから紫のプラズマを帶びた砲弾が、異常なまでのスピードで飛び込んできた。

数十トンの炸薬に匹敵するエネルギーが込められた砲弾が、アルティメイトストーム後方から100m近く、一直線に海面をえぐり、爆ぜた。

駆逐艦「ハルバード」の主砲であった。

「ようやくこの世界の軍艦にお目にかかれたか。見慣れぬロボットを相手にするよりは余程やりやすい」

デュラハン艦橋

一方、空母デュラハンでは、レーダー監視員が異常な現象に悩まされていた。

「くそつ、やつきか、ひモーターが変だな」

「奴らのECCMか？」

上官が尋ねる。

「いえ、索敵機能自体は正常に機能しております。何らかの電波障害かと」

そんな時、通信班からガイナーに報告が飛び込んできた。

「し、司令！先遣隊から救援信号です！」
「救援信号だと！？」

「読みます！」

我、敵新型艦の急襲を受け、被害甚大。
彼我の戦力差甚だしく、損傷を与えること敵わず。
直ちに救援を求む。
以上です！」

報告を受ける間にも、モニター上ではブルーのマーカーが次々と消えていく。

その一方、赤い点が不気味なまでの速さと小回りで動き回っている。

通信士とパイロットらの会話がオープンチャンネルで聞こえてきた。
ノイズが激しく、聞き取れる情報は少ない。

(……らし……ガガ……嵐が攻撃して……)

「落ち着け、状況を報告せよ。嵐とは何か

(……嵐、発砲……＝サイル……ああ！)
(隊機……シグナル……スト！……)

「ハルバードの状況は？」

(……当たらねえ…バリアが……)

(……うわああああ！！！ ザツ)

「通信、途絶しました！」

「艦長、報告によると敵の主力艦はホバークラフトタイプの超大型戦艦。船籍は不明。以上です！」

通信士が断片的な情報を報告する。

「ハルバードは何をしている。一体、あの海域で何が起こっているというのだ……」

サン・ニコラス島はすぐ近くまで迫っていた。

サン・ニコラス島近海

その海域では、アルティメイストーム後部の巨大なファンと船体から生み出される暴風が吹き荒れ、巻き上げられた海水が局地的なスコールを発生させていた。

その嵐の中、摩訶不思議な海戦が繰り広げられていた。

一方の艦は、竜巻の如く暴風雨に包まれているにも関わらず、甲板には無数の火柱が吹き上がり火災発生と見分けが付かない状況。もう一方の艦はその嵐に向け、レールガンを一定の間隔で叩きつけるが、すべての砲弾は着弾前に物理法則を捻じ曲げられたかのような不自然な減速で威力を殆ど失っていた。

暴れ狂うアルティメイストームに向け、ナイトメア部隊もアサルトライフルや魚雷を撃ちまくる。しかし、船体下部のスカートから猛烈な勢いで噴射される海水の壁に阻まれ、火力は大幅に削がれてしまう。海水をくぐり抜けた命中弾もあつたが、着弾寸前、空間にグリーンの稻妻が走り、レールガンと同じく見えない力で押し返さ

れるように弾速が急激に低下。命中弾は最終的に威力を大幅に削ぎ落とされ、大口径砲による近距離射撃を想定した異世界の重装甲に、損傷を与えることはできなかつた。

「全機下がれ、ケイオス爆雷を使う！！」

一機のグロースターが、脚部から円筒形の手榴弾らしきものを取り出し、アルティメイトストームに向け空高く放り投げた。船体から生み出される怒濤を飛び越えた爆雷は、そのまま落下するかと思われたが、それは空中で静止し、高速で回転始めた。

中央部が一瞬空転し、轟音と共にスコールのような散弾を敵艦に叩き付けた。しかし、窓ガラスに降り注ぐ雨のように防御重力場に押し流されてしまつ。

「だめだ、こんな装備じゃ勝てっこない！」

アルティメイトストーム艦橋

「艦長、あの駆逐艦のレールガンも重力場で対応できるようですね。助かりました」

カーターは安堵する。

「ああ。さつきの散弾放射も見たことのない兵器だったが、弾薬やメカニズム自体は我々の技術レベルに納まるものだつたらしい」

しかし、脅威にはならないレベルとは言え、集中砲火を受けるアルティメイトストーム艦橋は断続的に爆発音や衝撃で揺さぶられる。

「100パーセント威力を殺すことはできんか…

まあ、最新式ではないが、警戒する必要があるのはクソッタレの波動砲に重力砲、

ロング・ランスの近距離発射くらいのものだろ。」

この世界では敵から奪うこともできる。贅沢は言えんか

ちなみにロング・ランスとは、第2次大戦中、日本軍が使用した酸素魚雷のことであるが

カーネルが指したのは当然別のものである。

「艦長、敵ECMの使用周波数、特定できました！」

「オーケー、電子戦用意！」

「ECM作動します！」

「砲術班、派手にお見舞いしてやれ！」

「対艦ミサイルType-3、2番から8番ロックオン！」

「多目的ミサイルVLS、自動迎撃システムに接続！」

「用意良し、^{ファイア}発射！」

目標はレーダーに映る敵、全て。

そして、完全に体制を立て直したマンハッタンも反撃に出る。主砲の356mmバルカン砲が火を噴く。中口径砲の砲身を円形に束ねた“機銃”が回転し高速射撃を開始した。無数の砲弾がサン・ニコラス島に降り注ぎ、逃げ遅れたグロースターを粉砕する。アンダーウォーター隊は慌てて海中に飛び込んだ。

しかし、そんな彼らにも、アルティメイトストームが放った多目的ミサイルが食らいつく。陸上のグロースターに向け飛翔していたミサイルは、水中目標の増加を感知すると突如進路を変えた。そのまま海中に突つ込み、高性能の誘導魚雷と化し、アンダーウォーター隊に寸分狂わぬ精度で命中。ブリタニア側の水中攻撃は完全に途絶えた。

超兵器の復活で形成は一挙に逆転したのだ。

そして、ナイトメア部隊の通信は完全に混乱していた。

「くそつー！ あんなもん、カスつただけで粉々だ！！」

「回避しろー避けるんだあああー！」

デュラハン艦橋

（ハーリー5！）

現在、我が部隊は壊滅状態！ 遮蔽物がないこの島でこれ以上戦うのは危険です！）

「攻撃機の到着まで持ちこたえろ！」

（全機を出し飛ばした本艦に他に動ける奴はない。他の海上部隊では間に合わん。

……いや、いたぞ。あの連中が！）

「沿岸の本部と通信を開け、急ぐんだ！」

ロサンゼルス海岸

見渡す限りに広がる大海原は照りつける太陽で輝いており、透き通るような蒼さは日本の海とは異なる美しさを誇る。砂浜には椰子の木が立ち並び、青々とした芝生では海水浴客が日光浴を楽しんでいる。そんなのどかな光景は、水平線の向こうで行われている激闘とは対照的であった。

椰子の木陰に隠れるように、一丘のトレーラーが止まっている。

トレーラーと呼ぶにはかなりの大型で、その無骨な姿はリゾート地には不似合いであった。内部はナイトメア1機が丸ごと格納できる広さがあり、ナイトメアの分析用コンピュータなど研究に十分な設備がそろえられており、通信施設としてのレーダーも完備され移動型基地と言つてもよかつた。そのトレーラー内部では後部シャツターレを開け放つたまま、研究者たちが人型自在戦闘装甲騎・ナイトメアの調整に取り掛かっていた。

「もうー。」

大型コンピュータに向き合ひナイトメアの機体データを整理しながら、オレンジのスーツを着た女性が不満を漏らした。年このひはまだ若い。

「本国の海兵騎士団がランスロットを見せせりつていつからわざわざエリア11から出向いたつて言つのこ、『急用でいない』なんて馬鹿にしてるわ」

「いーじゃない、セシル君。

そのおかげで思いがけない休暇にありつけたんだからや。ねえ、スザクくん?

君だつて夏休み中は軍の仕事やらで学生らしい休みなんか殆ど取れなかつたんだろ?」

と、思い切り伸びをしながら、銀髪の科学者風の男が言つた。背格好は長身というより、ひょろ長いという形容が相応しい。なかなかの美男子だが、常に絶やさぬニヤケ顔のせいでいまいち“しまり”がない。

「仕方ありませんよ、仕事ですから」

パイロットスーツを着た少年が答える。グリーンの瞳が特徴的で、清潔な茶色のショートカットが利発そうな印象を与えていた。鍛え上げられた細身の体はいかにも身のこなしが軽そうだ。

そのとおり、科学者のデスクで電話が鳴った。

「はいはーい、特別派遣嚮導技術部『じぞいまーす』

「はいはい。え、本当に!?

ええ、大丈夫ですよ。すぐに伺いまーす。

『指名あーりがど』わーまあーす!—

無闇にテンションの高い科学者がダバダバと駆け寄つてくる。

「やつたーーー! スザクくんに出撃命令だよ。
SS級テロリストの新型艦に突つ込めつてさー

今、海の向こうで海兵騎士団が交戦中なんだけど、やられそうなんだって。

航空基地の戦闘機が到着するまでの時間稼ぎじゃないかなあ!」

「なんですか!?

「これが凄いんだあ。チラッと報告を聞いたんだけど、自重で潰れないのが不思議なくらい無茶な機構で
そのでかいのがモーター舟みたいにグルグル動いてるんだって
やーーー!」

脳内に浮かぶ敵艦の大きさを全身で表現する科学者は、嬉しそうな様子を隠そうともしない。

「無茶です、そんな艦と単機で戦うなんて!

せめて航空機の援護を待つて……

セシルが抗議する。だが、

「……いえ、行きます」

「スザクくん！」

「ロサンゼルスにテロリストが侵入したら多くの犠牲者が出る……僕がランスロットで食い止めます」

「ホント？ 賴んだよ、スザク君。

例のマリアナ海に現れたやつだといいんだけどねえ。

前から田をつけてたんだあ。アレ、荷電粒子砲じゃないかと思つた
だけど
どうやって実用化したんだろ」

「はは……最善は乃へします」

「ちゅうと、ロイドさん。不謹慎です……」

「お土産の戦闘データ期待してまーすー」

「ロイドさん！」

セシルが怒氣を帶びた田でロイドを睨み付けた。

「すいません、はしゃぎました」

その後、ロイドたちは急ピッチでランスロットを水上戦闘用に改装。

ジエットスキーワークの原理を応用した脚部ユニットを装着することにより、若干地上でのスピードは落ちるもの、海面を高速で移動しながらの水上戦闘が可能だった。

「ランスロット用の水上走行ユニットは急いでしらえだから、あまり無茶しちゃ駄目よ。」

スザクはランスロットのコックピットに乗り込み、起動キーを差し込む。ユグドラシルドライブのコアルミナスがゆっくりと回転を始め、瞬時にエネルギー供給を開始した。西洋の甲冑を思わせる、白と黄の一色でまとめられたナイトメアが砂浜に降り立ち、発進姿勢を取る。インカムを通じてセシルの指令が聞こえてきた。

「嚮導兵器N-01ランスロットは、水上走行ユニットを使用し、サン・ニコラス島に急行。

敵艦艇を撃沈せよ」

「イエス、マイロード……！」

ナイトメア機関の核とも言えるコアルミナスがピンク色に輝き、高速发展回転を始める。エネルギー供給量が急上昇した。

「ランスロット、発進します！」

野次馬が囁かれてる中発進した白い騎士の姿は、超スピードで海を駆け、すぐに水平線の向こうに消えてしまった。

何が起こったというのだ……

共に口サンゼルス港から出撃した友軍艦艇の沈む姿を見て、海兵騎士団所属艦、デュラハンの艦長は言葉を失った。僅か十数分の出来事だった。

不気味に沈黙を守っていた巨大ホバークラフトが突如暴れだし、

ブリタニア軍の力の象徴ともいえるナイトメア部隊を蹴散すや否や、続いて護衛についていた駆逐艦に牙を剥いた。

単艦に搭載する意味があるのか疑わしいほどに多数設置されたミサイル発射機や、

奇妙な形をした单装砲から放たれる無数の誘導弾の前に迎撃システムも意味を成さなかつた。ブリタニアが誇る電子工学の粋を集めた ECMもあつさり破られ、

すべての誘導弾が艦艇を直撃。マリアナ海の光景を再現することとなつた。

「敵艦撃沈！」

「ナイトメアの残存数は？」

「レーダー・ソナー反応なし。壊滅した模様です」

「そうか……やはり超兵器の制圧力は凄まじい」

報告を受け、ラファイエットの救助に成功したカーネルはひとまず安堵した。だが、超兵器の恐ろしさも熟知している彼は手放しに喜ぶことができない。

「残る1隻はどうしますか？」

「兵装もない、機体を全て吐き出したタンカーだ。放つておけ。今は離脱が先だ。」

だが

レーダー班が一瞬目を放した隙に、一つの光点が流星の如くモニターに飛び込んできた。

そして、左舷から一際大きな衝撃波が走り、アルティメイトストーム艦橋が大きく揺れた。

「何事か！？」

「左舷に被弾！」

「損傷軽微！」

「サン・ニコラス島より砲撃！　弾速よりレールガンと思われます！」

「まだ生き残りがいたのか？」

「いえ、先ほどの機より明らかに形状が違います。新たな援軍かと」

カーターがメインパネルに拡大画像を映す。

烈風吹きすさぶ荒野に、白いナイトメアが姿を現した。

青いライフルを構えこちらを狙い撃っている。

その姿はプレートアーマーに身を固めた騎士を思わせた。

もちろん、第零遊撃艦隊が持つ数少ない機体データには存在していない。

「あちらさんは単騎で再戦する気か…的確な判断だ」

対超兵器戦では無駄に数を引き連れても意味が無い。通常艦では、ろくに交戦もしないまま、超兵器の持つ常識外れの速度と攻撃力の餌食になり、犠牲を増やすことにしかならないからだ。徹底的に強化した主力艦一隻と最低限の従属艦数隻のみで挑むのがセオリーである。その意味でブリタニア軍の採った選択は理にかなっているといえた。

その間にも、ランスロットは一定の間隔で大型ライフルから銃弾を放つ。莫大な運動エネルギーを凝縮した弾丸を食らえば、通常の艦艇では一溜まりもない。だが、防御重力場と鉄壁の装甲に守られたアルティメイストームには深手を負わせるに至らない。

「グラヴィティ・ウォール！」

あの襲撃事件の艦艇に搭載されていた防護壁か！

ブリタニアでも研究段階なのに、あれほど強力なものを一体どの国
が…！？」

「敵の攻撃を引き付けるぞ。ラファイエットはまだ動けん。
あの兵装で狙い撃ちされると厄介だ。両舷全速、再び島に上陸する
！」

「Aye sir！」

「取舵一杯！！ 攻撃しつつ白騎士に体当たりしや。
ラファイエットに近づけるな」

二つの後部巨大ファンが唸りを上げ、再び陸に向けて突き進む。アルティメイトストームは重力を無視するかのように、その巨体を跳ね上げ海岸に降り立つた。

「押しつぶす気か！？ 間に合え……！」

一気にスロットルを全開にし、フルスピードでアルティメイトストームの右舷を走り抜けるランスロット。徐々に超兵器の巨体が迫つてくる。

「間に合わない、こいつするしか！」

再び敵艦のスカートに向け、ヴァリスを連射。防御重力場と弾丸のエネルギーがぶつかり合い爆風を起こした。その強風を追い風として速度を増したランスロットは船体に巻き込まれるギリギリのタイミングで後部に脱出。

ファンの強風に煽られ、バランスを崩しそうになるが巧みに姿勢を制御する。

時間にしてわずか十数秒の出来事だった。

無事にアルティメイトストームの体当たりをかわしたランスロットをマンハッタンの援護射撃が襲つ。恐るべき発射速度で放たれる砲弾が頭上に迫る。

しかし、スザクは操縦桿のトラックボールを押し込み、左のアームから緑色のシールドを開いた。そして、常人を遥かに上回る動体視力と、ランスロットの運動性能でガトリング砲弾を回避し、ミサイルの弾道を読みきり、受け流した。

「なんてこった……

敵さんも防御重力場の開発に成功していたのか！」

「なんて大きさだ……

すれ違うだけでもこんなに時間が！」

彼方の異次元で生まれた超技術の激突は、両者を等しく打ちのめす。

「ここで倒す必要はない。航空機が来るまで時間を稼ぐんだ」

スザクはオープンチャンネルで謎の戦艦の乗組員に呼びかける。

「応答してください。僕はブリタニア軍所属、枢木スザク少佐です！」

アルティメイトストーム艦橋

「艦長、白騎士から通信です！」

「何だと！？ 繋げ、早く！」

艦橋のメインパネルに現れたのは茶色い髪の少年、しかも日本人で

あつた。

「君は……日本人か！？」

「あなた方が何者かはわかりませんが、投降してください。
確かにブリタニアのやり方に問題はある。でもこんなやりかたじゃ
何も変えられません！」

テロじや人々はついて来やしないんだ」

「先制攻撃か……

既に我々は正当な手続きを踏んで貴国に宣戦を布告した。

君たちがエリア11と呼ぶ、日本の内政省の問い合わせてみたまえ。
君が何を思い、祖国を侵略した國に加担しているのかは判らんが、
我々にも祖国を取り戻す使命がある。君が日本人でも手加減はしな
い」

「どれだけあなた方の技術が優れっていても、ブリタニアがその氣にな
れば、いはずれは押しつぶされてしまします。僕が言える事ではあり
ませんが、あなた達にも血を流してほしくない」

「物量だけが全てで無いことを思い知ったのさ、私は。気持ちだけ
はいただいておこう。

わらばだ」

ランスロット

通信はそこで終わつた。

「くそつ、駄目か……」

外から砲撃音が轟く。

二度目の戦闘開始を告げる合図だった。

「戦うにしても、あのバリアを何とかしなければ……！？」

スマートスフィアで素早く敵艦の外見を観察するスザク。モニターには船体から滝のように海水を降らせるアルティメイストームが映っている。

それはスザクにある閃きをもたらした。

「海水は船体を伝っている……」

一定の速度や爆発力がないと反応しないのか？いや、それだと速度の遅い魚雷や機雷に対応できない。妨害対象をデータベース化してるので？それなら……やるしかない、一か八かだ！」

スザク親指で操縦幹のトラックボールを操作し、パーティ管理のウインドウを表示した。

水上走行ユニットから、地上走行用ランドスピナーに換装。そして、兵装をヴァリスからコクピット両脇に格納された一本の剣に持ち替えた。

暴風に煽られながらも、ランスロットがアルティメイトストームに向け突進した。

勢いよく飛び上がったランスロットが、すれ違いざまアルティメイトストームのスカートを一直線に切り裂いた。

右舷から爆発音が響き、艦全体が大きく振動した。

「What!？」

「防御重力場が作動しない！」

「白騎士の武器は脅威対象データベースに存在しません！」

レールガンに酷似した先ほどの兵装はともかく、あのソードは全く未知の兵器です。

防御重力場のセンサーには反応しません！」

ランスロット

「思つたとおりだ。

やはり、ある程度の攻撃手段のデータがないと排除すべき対象を識別できないんだ……！

メーザーバイブレーションソードのメカニズムは、まだロイドさんの研究データにしか存在しない！

アルティメイトストーム艦橋

「速度低下！ まもなく地上での航行が不能になります
「水上に戻るぞ！」

「艦長、ここはあのナイトメアを叩いておきましょう！」「冷静になれ、カーター。どういう原理かは分からんが、先ほどの攻撃を見るに奴は防御重力場を無効化できると考えたほうがいい。他にどんな隠し玉を持っているかわからん。

これ以上増援がこないうちに高天原に帰還する。」

「はっ」

(……あんな小さな機体で超兵器と殴りあうとは、彼は一体…
ただの少年でないことは確かだろうが)

サン・ニコラス島 海岸

スザクは、一席の僚艦を引きつれ、引き上げていくアルティメイトストームを見つめていた。既に口は沈もうとしていた。

「帰っていく…

彼らはただのテロリストじゃない…」

そして、二者の通信を聞いていたガイラー卿も気づいたのだ。
彼らが最早テロ組織などではなく、本気でブリタニアに戦争を仕掛けている「国家」であると。

「内政省に通達せねばなるまい……

エリア11に届いたテロ組織の犯行声明を洗いなおせと」

時空を超えた超兵器の激突は両者痛み分けで幕を閉じた。
この戦いを分岐点とし、世界の運命は大きく動き出すことになる。

(了)

第3話・風神、荒野に舞い降りる（後書き）

続きに約100日もかかってしまいました…

本当に申し訳ないです。

本編のほうは続編製作が決定しましたね。

まだまだ続きが見たいアニメなので嬉しいです。

ここまでストーリーに引き込まれるアニメは久方ぶりです。特に2話は衝撃的でした…

あと、ご連絡しなければないことが一つ。4月から就職した関係で唯でさえ遅い更新がさらに遅くなると思われます。

正直なところ、次回がいつになるか見当がつかないので、まだ読んでくださるという親切な方は、忘れたころ気が向いたころに立ち寄つて下さると
ちょうどよいかと…

申し訳ありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2569b/>

鋼鉄の咆哮～異世界からの反逆者

2010年10月10日11時43分発行